

隠れたダイバーシティ大国スイス

ダイバーシティ コンサルタント
栗崎由子

スイスというと、日本では時計、チョコレートやアルプスがよく知られている。しかしこの国が実は隠れたダイバーシティ大国であることは、案外見落とされているのではないだろうか。

スイスは文化の多様性の大変豊かな国だ。そのような国だから、ここにはダイバーシティを資源として活用する仕組みがある。

ダイバーシティは国の誕生から

スイスは狭い国土に26の共和国(州)からなる連邦国家だ。そのため、日本では考えられないことがいろいろ起きる。例えば義務教育は各州の権限だ。その結果、教育期間やカリキュラムという基本的な点について、国家として共通の制度がない。

このような国家ができた理由には、歴史的な背景がある。

スイスは歴史を通じて終始領主に支配されない自由民の集まりとして存在してきた。まず13世紀末、自由民の集まりである盟約者団と呼ばれる集団がスイス中央部に成立した。その後、隣接する自治共和国(現在の州)が自由意志でそれに参加を続けてきた。宗教改革やナポレオンによる征服など歴史の荒波はあったが、自治共和国の数は



(写真1) 国境を通過する、フランスからの通勤者の車の列

増え続け、19世紀中頃に現在の連邦制度の基礎が成立するに至った。

スイスは自治権を持つ共和国が緩やかにつながる連邦として成長してきており、その根本精神は今も変わっていない。スイスのダイバーシティは、国の成り立ちと不可分なのである。

国境と国籍が“柔らかい”社会

スイスは外国との関係もまた、緩いつながりを巧みに保っている。ここに住むと国境は柔らかい、としばしば感じられるほどだ。

首都ジュネーブは、国境を接するフランス領内をも含めた経済圏の中心地でもある。高速道路の入り口や国際空港付近には工業団地があり、有名な高級時計メーカーなど雇用力のある企業が立地している。そこには毎日約7万人の人々が、フランスの隣接地域から国境を通過して通勤通学する(写真1)。その数は毎年4~5%ずつ増加し、今では10年前の約2倍となった。

このような越境通勤者はジュネーブ州全体の就労者の約4分の1を占める。つまり外国人の労働力があるからこそ、ジュネーブの経済は成り立っていると言える。

国籍もまた柔らかい。ジュネーブの人口の約60%は外国人か、スイス人でない両親から生まれた人々である。しかもスイスは重国籍を認めている。例えば、スイス人の母親とフランス人の父親を持つ子どもにはスイス国籍が与えられるが、その子どもは同時にフランス国籍を持つことができる。そういう人が大勢いる社会では、「あなたは何人ですか?」という質問はあまり意味を持たない(写真2)。